

恵那峡における風景経験の枠組みの変化と環境の物理的変化について

The Change of the framework of Landscape Experience and
the Transformation of a Physical Environment in the Ena Gorge

指導教官 斎藤潮

97M43030 緒方稔泰

SYNOPSIS

Representations of environment have been changed both by the transformation of physical environment, such as a construction of buildings, and by the change of our thought, belief, attitude toward environment. During Taisho period Shiga, a geographer, was invited to the Ena gorge for designing a pleasant tourist resort by giving names to some components of the landscape and afterwards the Oi dam was constructed. This paper describes the change of representations of the Ena gorge influenced by these events and illustrates the way of landscape designing. The results show the importance of naming with metaphorical expressions to give impressions and appreciation of the landscape, and a dam itself is not regarded as an object to be named but a lake formed by the dam seems to give a certain pleasure instead of gorge scenery.

1. 序論

1-1. 研究の背景と目的

「風景」とは人間と環境とに介在した現象、すなわち環境の視覚像そのものではなく、我々の心的活動による解釈が加えられた環境認識によって生じる現象であるとすれば、風景の変化は、①人間の環境に対する視覚的接触の様式の変化と、②環境の物理的変化とによって生じることになる。

環境は我々が生活していく上での諸活動により絶えず変化している。それは主に構造物建設による環境への直接的、意図的な行動に起因する変化及び人類生命維持のためになされる諸活動により地球温暖化や砂漠化といった間接的、無意識的に発生する変化である。しかし、我々が認識している風景の変化とは、実際の物理的変化のみにより起こるものではない。なぜなら、我々の心に映し出される環境の表象は、知識、思想、信念といった我々の心的活動の影響を受ける可能性があるからである。

明治時代以降近代化が推し進められる中、様々な人為的な手が自然環境に加わった。その一つには、コンクリートという新素材を利用したダムがあげられる。これまで、踏み込む事の無かった山林の中に突如として巨大な近代構造物が建設され周囲の環境を変えていった。これらの構造物や環境の変化に直面した周囲の人々はどのように受け止めたのだろうか。

近年、景観または環境デザインという言葉が一般に普及されるようになったが、近代には構造物の設計に主眼が置かれ、その構造物の導入がそれを取り囲む景観をどのように変化し、認識されるかといった問題に答えるものは少なかったと思われる。そこで、今後の我が国における国土開発の意味を再考する上で近代における前例を研究する事は大変意義のある事と考えられる。

以上に鑑み本研究では、風景が変化する要因となる上記の①②の現象がおこった興味深い場所であると考えられる岐阜県の恵那峡を対象地として、①②の現象がどのように影響し風景が変容したのかを整理し、それらの風景がどのように捉えられていたかを明らかにすることを目的とする。

1-2. 研究の対象

本研究の対象は、岐阜県大井町に位置する木曾川上流の大井ダム及びその周辺である恵那峡(図1)とする。恵那峡は近世から近代にかけて、木曾川の運材時の便宜上の地名散布から、志賀重昂の名所選定と川下り観光時代、大井ダム建設に伴う環境の変化とダム湖遊覧時代といった多様な「変化」を経験した景勝地である。このように大規模構造物建設による物理的環境の変化以前に、その利用目的の変化があり、前節1-1に示した風景変化を考察する上で適当な研究対象と思われる。

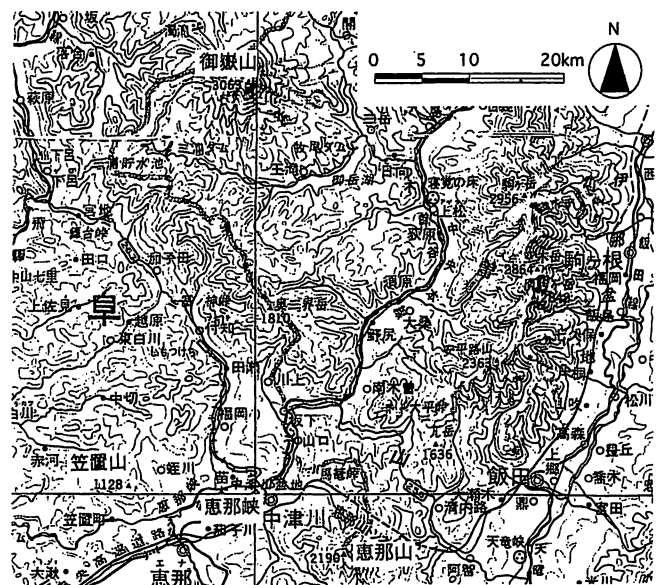


図1. 恵那峡の位置

1-3 研究方法

物理的環境変化に加え人為的な生成プロセスをもつ「風景」の表象を分析するため、近世から近代に発行された地誌、絵図等の資料から大井ダム、恵那峡に関する記述を抽出し分析する。分析資料(表1)は、岐阜県図書館所蔵の恵那峡に関

表1.分析対象資料

運材時代	木曾川川並絵図 ¹⁾ (『犬山市史史料編1』収録) 木曾山	犬山市史編纂委員会 徳川義親	犬山市 徳川義親	1979 1915
ダム建設前	恵那峡(雑誌『太陽』収録の紀行文) 恵那峡 恵那郡史 ²⁾	時任為文 恵那郡教育委員会	博文館 下出出版 恵那郡教育委員会	1920.8 1922 1926
ダム建設後	木曾瀧楓と恵那峡探勝案内 木曾川下り恵那峡舟遊案内 名勝恵那峡	大阪運輸事務所 渡辺三千里 川橋善五郎	大阪運輸事務所 恵那峡の会 川橋善五郎	1926 1927 1930
戦後	新日本観光地案内 新日本ガイド第11	毎日新聞社	信行社 日本交通公社	1952 1976

1) 原本は1727年に完成したとされる。 2) 出版はダム建設後であるが、ダムに関する記述以外はダム建設前のものである。

する詳細な記述のある地誌全てとする。加えて、地形図、現地踏査、CG等による検証、分析を行う。

1-4.研究の構成

当該地の風景は、運材時代の風景、志賀による観光を目的とした名づけによるデザインによって生成された風景、そして大井ダム建設に伴う環境の変化による新たな風景の3段階に表すことができる。その様子を図2に示す。

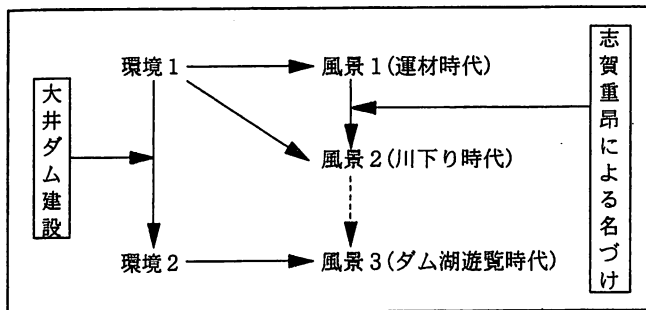


図2.恵那峡の変遷

本研究の構成は、第2章で大井ダムおよび恵那峡周辺の歴史的背景を説明し、第3章では運材(風景1)から観光(風景2)へという利用目的の変化にかかる風景の変遷、第4章では風景2からダム建設によって新たに生成された風景3への変化について考察する。最後に第5章で結論を述べる。

2.恵那峡の変遷

2-1.運材時代

木曾川は古くから運材に利用され、近世を代表する運材河川であった。木曾川は、木曾・飛騨材の流送ルートとして、運賃負担力の乏しい木材の商品化と、木曾・飛騨の開発を促進する上に大きな役割を果たしてきた。

その方法は「木曾式伐木運材法」とよばれ、現在恵那峡と呼ばれている付近では大川狩が行われていた。大川狩とは別名管流しとかバラ狩りとも呼ばれ、水量のある木曾川本流を流す運材法である。

運材中の木材の損傷は大きな損失となるため、事前に浅瀬や岩の鼻などを識別できなければならない。そのため、運材関係者たちは実用のために「名づけ」を行い難所などに対する認識を共有していたのである。

2-2.川下り時代

現在恵那峡と呼ばれる付近の風景は大正初期まで運材関係者などごく一部にしか知られていなかった。大正6年に当地の瀬田秋三郎が川舟で実地を視察し、これが川下りの始まりといわれている。その後彼らは恵那溪保勝会を設立し、大正9年5月に木曾川下流の日本ラインの命名者であり、『日本風景論』の著者である志賀重昂を招き川下りを行った。この際志賀は「恵那峡」と改名すると共に、様々な名所選定(岩などへの名づけ)を行った。志賀の名づけは、これまでの運材時の実用上の名づけとは枠組みの異なるものであった。運材時の名称は難所の認識が主目的で単純な名づけであったのに対し、志賀による名づけは、単に認識の共有化を可能に

するだけでなく、同時に何らかのイメージを想起させるような名づけ方であり、観賞のための名称へと転化させた。この時の志賀の紀行文が「恵那峡」と題して大正9年8月号の雑誌「太陽」に掲載され、

世に恵那峡が知られる契機となり、川下りも盛んに行われるようになった。

2-3.ダム湖遊覧時代

著名な景勝地となった恵那峡だが、大正13年の日本初の水力発電用ダムである大同電力の大井ダム式堰堤の完成に伴い、急流に舟を走らせる川下りは、その趣を失い中止せざるを得なくなった。同時に近世から続いた木曾式伐木運材法の歴史は終わりを迎えた。

この大井ダムの建設によって、これまでの急湍碧潭の流れや奇岩怪石を誇った深谷美の半ばが水没してしまったが、それに変わって上流玉蔵橋に至る大湖水が出現し、流れより遠く兩岸に屹立していた断崖絶壁が水辺に迫り、水は深く波は静かになって兩岸の緑樹紅花を倒映することとなり、藍碧の水面に山も木も花も生きて、これまでとは枠組みの異なる景勝が人々を誘うようになった。

このように、ダム湖の出現によって川下りは終わりを迎えたが、それに変わって遊覧船(当時は発動機船・モーター船・屋形船・貸ボートなどがあった)による恵那峡めぐりが新たに生まれ、現在に至っている。

3.名づけという風景経験の枠組みについて

3-1.名づけ行為についての分析の視点

本章では名づけに特に着目した分析を進めていくが、その景観的意味を考慮して以下の2点の分析によりその風景体験の枠組みを分析する。

(1) 一定の環境下において、人が特定の要素(岩崖、水面等)を対象物として選択している点に着目し、その傾向を把握する。

(2) 選択された対象物(名づけの対象)を見た人はどのように受けとめているかということについて名称や記述により分析を行う。

3-2.志賀による名づけの視点

運材時代の名称と志賀による名づけを分析し、考察を行う。それぞれの名称を名づけられた要素ごとに分類すると、表2のようになる。

表2.各要素数

	運材	志賀
岩・崖	21	23
瀬・淵	18	1
瀧	0	1

これによれば運材の時代と志賀による名づけとの基本的な差は、名づけの対象、すなわち視対象であり、運材時代は実用上問題となる瀬(水面)であったのに対し、志賀は舟運上は問題とならない兩岸上の岩や崖(上方)に目を向けている。

3-3.名づけの根拠

名づけの根拠とは類似、付属、エピソードに3別される。しかし、運材時代の名称にはワレ石等のようにその状態を端的に示したものが見られる。また坊主岩などは外形の類似によるものと思われるが、坊主という名称は恵那峡だけでも2例、その下流まで含めると4例見られる。同様に片マクリという表現も4例見られ、これらの表現は運材時においては慣用化されているといえる。例えば坊主という表現は表現は坊主自体を連想させるのではなく丸くつるつとした状態の

直想に直結していると考えられる。このように運材時の名称は、志賀が目指したような表現の含蓄による新たな風景生成が目的ではなく、それがどの場所であるか、危険であるかなどといった情報さえ認識できればよく、実用のための名づけであったといえる。

しかし、名づけの目的は異なっても基本的にその根拠(表3～5)の特色は変化していない。主要な名づけの根拠は外形の類似性という点で各時代とも一貫している。

表3. 運材時代の名づけの根拠

直接形容	ワレ石、割石、ニツ石、ワリ岩 (名折)坊主岩、割石坊主、片マクリ
類似	鎌石、白石、猫岩、棚岩、源齋岩、エホシ石、蕎麥壺岩、馬石、獅子岩、金床岩
付属(近接)	
エピソード	龍燈石

不明: 盗人、ガナーコ、ツク岩

表4. 志賀の名づけの根拠

類似	巨象岩、臥牛岩、羊石、犬岩、猫石、霜崖、百雷湍、品ノ字岩、首無し地藏、後阿彌陀、磨崖、天柱、玉簾ノ瀧、ニツ獅子、寶頭廬岩、豆腐岩、小獅子岩、獅子岩、將軍臺、夫婦岩
付属(近接)	青崖、観音崖
エピソード	武光岩、蟹龍洞、一齋岩

表5. ダム建設後から現在までの名づけの根拠

類似	鞍掛岩、兎岩、大蛇岩、鬼岩、墓岩、帽子岩、枕岩、天狗岩、砲臺岩、霜崖、犬頭岩、双子岩、蛙岩、うずら岩、鏡岩、軍艦岩、虚無僧岩、鳥帽子岩
付属(近接)	對松崖
エピソード	馬返りの崖岩、ななし岩

3-4. 長期間定着している名づけ

様々な名づけが各時代にされているが、それがどの程度定着しているのかについて考察する。各時代に名づけられた岩崖の個数と、ダム建設時に水没し消失したものを除き、現在でもその名称が残っているものの個数を整理すると表6のようになる。

表6. 定着した名づけ

	a. 岩崖	b. 水没	c. 対象残	d. 名が現存	d/c
運材時	20	10~12	8~10	3	30%
志賀(1920)	23	7	16	4	25%
ダム直後(~1930)	12	-	12	0	0%

運材時、志賀による名づけは一定の割合で存続しているのに対し、ダム建設直後に名づけられた名称は残っていないのが特徴的である。こうした結果より岩崖に対する運材時代、志賀による対象の選択と名づけは、後世の名づけに比べ認識上基本的なものだったと考えられる。

3-5. 現存地名の特色

運材時代および志賀により名づけられ、今日残存している地名は7つである。そのうち5つの名称は將軍岩(台)、金床岩、屏風岩、天指(柱)岩、品の字岩(写真1)で、それらは人為的な加工を施したと見えるような岩崖の形状に着目した名づけになっている。外形の類似性により、人工物に見立てた名づけだけでなく、自然物に見立てた名づけも数多くなされてきたが、長い時間を経て継承されているものは上述のようなものである。自然風景を見ながらもそこに人為的な造作を見て取るという一見矛盾とも思える行為は、自然対人工物という対比にこそ面白味を感じ、視線が向くようになったのかもしれない。このように自然の岩崖に人工的要素を見ようとする態度があることは興味深い。

3-6. 水没地名と新たな名付けとの関係性について

名づけの経年的な変化を追っていくと、ダム建設で水没した地名が多い特定の箇所(品の字~巨象岩間)において、失わ

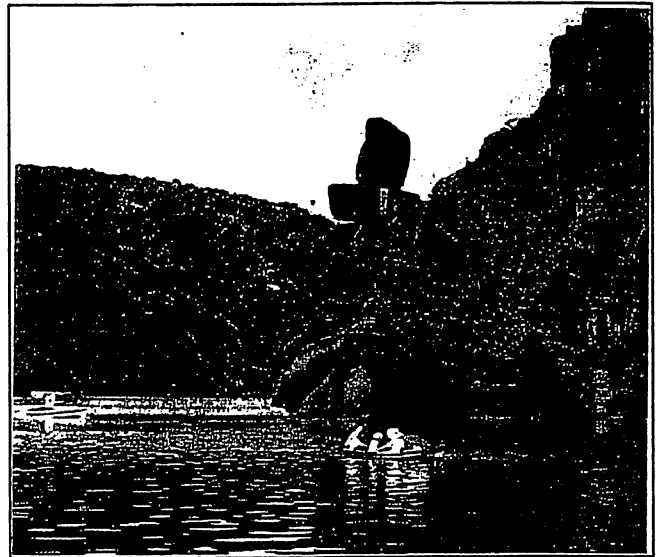


写真1. 品の字岩

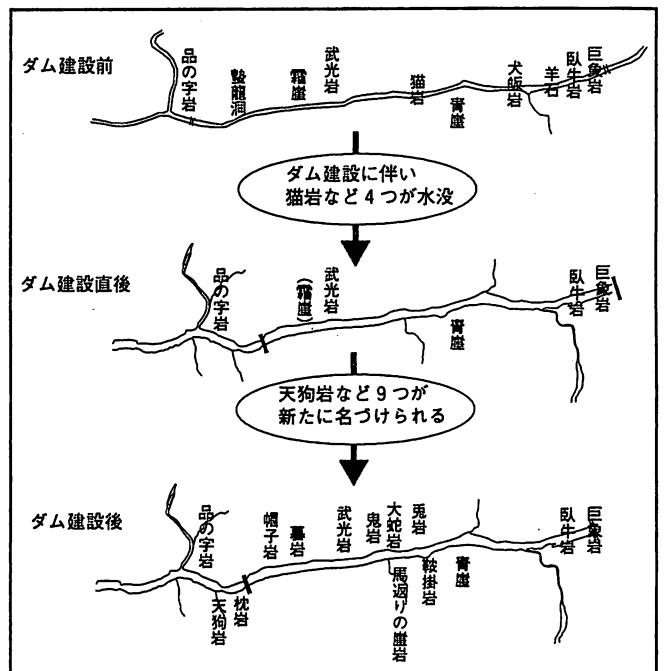


図3. ダム建設前後における名づけ地名の変化

れた名づけを補うかのように追加命名される名づけがあった。(図3)

なお、当該箇所は当時恵那峡観光において重要なポイントであったとされることから、水没により失われた名所を補強する目的があったのではないかと推測される。

4. ダム建設に伴う風景の変化

4-1. 眺望景の変化

ダム建設によって、堤体の出現、水位上昇、水面の拡大などの変化が生じた。これに伴い峡谷外の景観体験が変化、拡大した。その結果これまであまり眺められることのなかった溪谷外の山への眺望機会が拡大したことが特徴としてあげられる。CGや可視領域変化の測定および文献の記載から大きく以下の3つの山への眺望機会が変化・拡大した。(図4)

堤体付近からの笠置山の眺望は上流部からのそれとは全く異なった山容を呈している。またダム建設以前は眺望ができなかった御嶽山が現在では遊覧船の船内放送でアナウンスされており主要な風景経験の一部として定着している。

ここでは、御嶽山についてCG(図5・6)を用い、ダム建設前後の眺望変化を検証する。御嶽山は図4に示すような

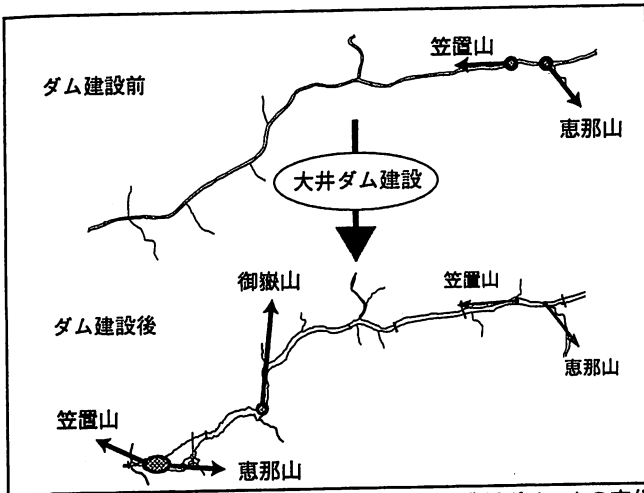


図4.ダム建設に伴う眺望ポイントの変化

位置で眺望可能となり、遊覧の途中で船が方向を変えるあたりで突然進行方向に見えるようになった。

4-2.風景要素に関する記述の変化

次にダム建設前後の風景の描写に関する記述の変化について考察を行う。

(1)水面表現に関する変化

ダム建設前には数多く多様な表現であった水面に関する表現箇所の数が建設後減少し、かつ水面の表情に関する記述が一様化した。また、ダム建設前には個別完結的な記述中心であったのが、建設後には恵那峡自体をひとまとまりの空間とし、例えば一大峡湖といった広域の水面に関する描写があらわれるようになる。

こうした点から個別・多様な水面の表情や描写がダム建設後に広域・一様化したといえる。

(2)岩崖(視対象)との視距離変化

ダム建設による水位の上昇が視対象への視距離を近接化させるとともに自然視野に近い仰角で眺められるようになったといえる。また、ダム建設前後の写真あるいは風景描写の変化などから、奇岩怪石に近づいて眺められるようになり遠望観賞的態度から近接触覚的観賞態度への変化が確認できる。

4-3.ダム本体の出現に関する記述

ダム本体に関する記述(表7)の特徴は以下のようにまとめられる。

(1)規模・機能の記述が中心で形状に関してはコメントがなく、また名づけ行為も行われていない。

(2)ダムより生じる落水表情について「人工の奇観」と称して人工的なものと認めながらも自然との調和を認めようとする態度が見られる。それはダムの落水が天然の瀑布に見立てられている例から解される。

表7.ダムに関する記述

恵那郡史	恵那峡探勝案内	恵那峡舟遊案内	名勝恵那峡
最近大同電力会社のダム式堰堤成り	・背水は湛えて一大美瀧となり ・恵那峡をして斯くも大々的に變化せしめたる大同電力の大井ダムは大井町奥戸間に一大堰堤を築造して木曾川の本流を塞ぎ止め之を二條の壓力隧道に導き、更に四條の鐵管によつて發電所に送水し四臺の水車を運轉して四二、九〇〇キロワットの出力を作為し一五四、〇〇〇(ボルト)の電壓使用に供するが所謂大井ダムそのもので先ず押しも押されぬ本邦百東洋一のダムである。	・大同電力会社のダム堰堤は東洋一の壯觀を以て知らる。大正十三年八月工事竣工し河水の堰止めを行つた。 ・堰堤高さ百八十尺、長サ一千尺混凝土。貯水壘十億立方尺堰堤上流三里十二町。面積百七十一町。水量流域百二十三方里。發電機四台。勵磁機二台。電力四万二千九百キロワット。	・木曾本流の水が錦の如く、雪の如く白沫を飛ばし輕蹄とし一時に百雷の怒號するかと疑はるゝ響きを立てゝ直下奔流する美觀は、人工の奇觀もこゝ迄に達せば自然の風致を害ふことなく、寧ろ天然の景光と合体して自然そのものを却て豊富にする觀があります ・一見ナイアガラの瀑布を想はしめる大堰堤の壯觀に ・堰堤の壯觀

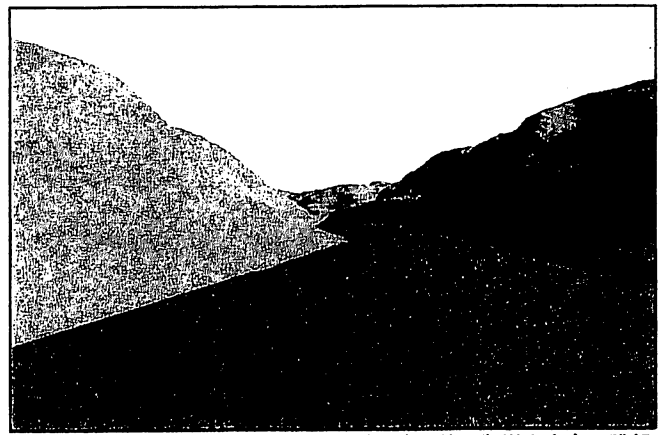


図5.ダム建設前の御嶽山方向の眺望

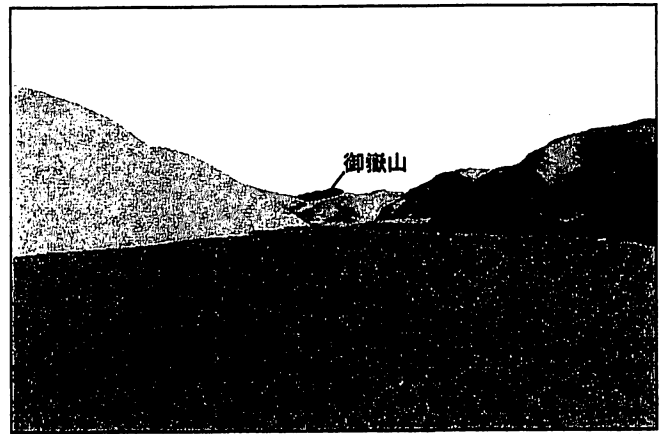


図6.ダム建設後の御嶽山の眺望

5.結論

5-1.結論

本研究では以下のような結論が得られた。

(1)運材時代から現在に至る恵那峡の風景変化を名づけや環境の変化の分析を通じて明らかにした。

(2)名づけによって風景を見ようとする態度は近世から現代に継承された。その顕著なものは外形の類似性から類推によって名づける方法である。その中でも自然物に見立てて名づけられたものよりも人工物に見立てて名づけられたもののほうが多く定着している。

(3)ダム本体もしくは部分に対しては名づけは行われていない。これは自然の岩崖が人工物に見立てられたことと比較して興味深い。これに対し落水には自然的調和を認めるような名所の見立てが行われていた。